

現代能歌劇「夕顔」台本 二幕四場 第一幕原作：紫式部作 源氏物語「夕顔の章」
第二幕原作：内藤左衛門作 能「半菫」^{はじとみ}

舞台＝舞台背面垂れ幕の前に「後座」や「出囃子」にならって、雛壇に演奏者が椅子にかけて列ぶ。
室内管弦楽

木管四重奏 Fl. Ob. Cl. Fg. 弦楽四重奏 Vn.1 Vn.2 Vla. Vc. ハープ 1 ピアノ 1
時：平安時代 夏から秋の物語

所：第一幕 第一場 京都五条の夕顔の宿 門前 第二場 夕顔の宿付近 とある屋敷
第二幕 第一場 紫野の雲林院にある僧の住まい 第二場 夕顔の宿

登場人物

夕顔（ソプラノ）＝本妻の嫉妬を恐れて夕顔の宿に暮ら、美人薄命を絵に描いたような悲劇的女性。

光源氏（テノール）＝桐壺帝の第二皇子。

六条の御息所（メゾ・ソプラノ）＝大臣の娘で16歳で東宮妃光源氏との恋におちる。

藤原の惟光（バリトン）＝光源氏の供人。光源氏の大貳の乳母の子供。

紫野・雲林院に住まう僧（バリトン）＝第二幕で、一夏の間、仏に供えた花々の立夏供養をする。

第一幕 原作：紫式部作「源氏物語 夕顔の章」

第一場「玉鉾」 時：平安時代、夏の黄昏どき 所：京都五条 夕顔の宿 門前

登場人物と配役

夕 顔（ソプラノ） 光源氏（テノール） 藤原惟光（バリトン）

前奏曲

名乗り 光源氏と惟光が話している。

源氏 五条の乳母は元気そうで、何よりでしたね。

惟光 はい。安心しました。

源氏 お隣は檜の垣根も新しく、半菫^{はじとみ}を上げて、真新しい簾で とても涼しそうですね。

惟光 はい、とても涼しそうです。

源氏 おや、簾の隙間から女の人がこちらを覗いている。額が美しい。背の高い人のようだ。垣根の
つる草に可憐な白い花が咲いている。

問答

源氏 あの花は、何の花だろう？

惟光 夕顔です。垣根や道端に咲く花です。

源氏 一房とってこないか。

惟光 畏まりました。（下手に移動）

夕顔 （下手に登場）これに載せて差し上げてください。枝が頼りないので。（夕顔を扇に載せ渡す）

惟光 頂いて参りました。扇にかぐわしい香がいたします。（光源氏にわたす）

源氏 魅力的な香りだ。扇に和歌がしたためてある。（和歌を見る）

夕顔 （下手で歌う）「心あてにそれかとぞ見る白露の 光そへたる夕顔の花」

源氏 （和歌を復唱する）「心あてにそれかとぞ見る白露の 光そへたる夕顔の花」

夕顔 （光源氏と二重唱）もしかして、源氏の君ではありませんか？ 夕顔の花。

源氏 上品で趣ある歌だ。隣の家はどなたの住まいだろう？

惟光 国司の名誉職にある方の住まいです。あるじは地方へ下っています。奥様はお若くて、風流を
好み、宮仕えをされておいでだそうです。

源氏 宮中の女性ですか。「源氏の君ではないか」と歌を詠んできたのは見過ごせません。こういう
女性は、じっとしてられないのでしょうか。（短冊に和歌をしたためて謡う）

「寄りてこそ それかとも見ぬ たそがれに ほのぼの見つる花の夕顔」

近くに寄って見たら 如何ですか？黄昏に光添えるかを。これを届けてください。

惟光 畏まりました。(短冊を受け取り、下手に退場)

暗 転

第二場「十五夜」 時：月が西の空に沈みかける明け方 所：夕顔の宿付近 とある屋敷

登場人物

夕 顔 (ソプラノ) 六条御息所 (メゾソプラノ) 光源氏 (テノール) 藤原惟光 (バリトン)

問答 下手から夕顔の君と光源氏が登場する

源氏 今夜は十五夜です。満月が美しいですね。さあ、このあたりで、ゆっくり夜を明かしましょう。こうしているだけでは、私はつらいのです。

夕顔 そんな。お急ぎにならなくても、いいではありませんか。

源氏 来世でも、来世でも私は恋人でいたい。この世だけでなく、来世もあなたと恋人でいると約束します。かたく約束します。さあ、屋敷へ入りましょう。

昔の人もこのように恋の道に迷ったのでしょうか。私には未経験の明け方の道です。あなたは、経験したことがありますか？

夕顔 「山の端の心もしらでゆく月は うわのそらにて影や絶えなむ」。

あなたのお心が分からない私は、心が上の空で、消えて、消えてしまいそうです。

源氏 「夕露に紐とく花は 玉銚たまぼこのたよりに見えし えにしこそあれ」

「白露の光そえたる夕顔の花」とあなたが歌った私は、如何ですか？

(真っ直ぐに夕顔を見つめる)

夕顔 (源氏の顔を見ながら)「光ありと見し夕顔の上露は たそがれ時のそらめなりけり」

源氏 アッ、ハッ、面白い。いつまでも隠していらっしやらないで、お名前を教えてください。でないと気味悪いですよ。

夕顔 「白波の寄する渚に世を過ごす 海人の子なれば宿も定めず」

源氏 恋人同士なのに、情けない。格子を下ろして灯火をつけましょう。

— (突然、不気味な音楽が流れる) (不意に灯りが消える) —

六条 (登場、ステージ中央にて)

私が素晴らしい方とお慕いしているのに、お訪ねてくださらないで。

こんなにお慕いしているのに。このようなどうでもいい女を可愛がられるとは、本当に悔しいではありませんか。本当に悔しいではありませんか。

源氏 あなたは六条の方…。惟光！灯りをくれ！

惟光 (下手ステージ裏で) とても行けません。暗くて…。

源氏 まるで子どもみたいだな。誰かを呼ぼう。(手を叩く)

(不気味な音が 符こだま のようにかえってくる。)

夕顔 「助けて下さい！」

六条 (下手に退場する)

源氏 惟光、早く来てくれ！このお方が大変な怖がりようだ。

惟光 (下手より灯りを持って登場) すみません。灯りを持って参りました。まるで病気になったみたいで伏せてました。

源氏 このようなことは、物語などでは聞くけれど。本当に気味の悪い夜だ…。もうし、もうし、息をしていない！冷たくなっている。

惟光 まさか！お亡くなりになるなんて。

源氏 愛しい人！生き返ってください。

惟光 夜の声は異様に響きます。お静かに。

第二幕原作：内藤左衛門作 能「半蔀」^{はじとみ}

第一場「立花供養」 時：平安時代、晩夏の夕刻 所：京都紫野雲林院 僧の住まい

登場人物

夕顔の精（ソプラノ）夕顔の花の精の如き、夕顔の君の亡霊。

雲林院の僧（バリトン）

下手に立花供養の花があり、僧が供養をしている。

名乗り

指し 僧が中央に立つ

僧 草木をはじめすべての生きものが皆悉く成仏できますように。夏の間、仏に供えたお花の供養をしています。草木国土悉皆成仏。草木国土悉皆成仏、立花供養。

あしらい出し＝能囃子の奏法。応対

下の謡

夕顔（下手、立花供養花影より出現）

手に取れば 手ぶさに汚る立ちながら 三世の仏に花 奉^{たてまつ}る。

掛合い

僧 不思議だな。いろいろな花が同じように咲くなかに、一輪だけ白い花が際立って見える。捧げた花は、何の花ですか？

夕顔 お坊様、お分かりになりませんか。今は夕方、ひと里で垣根にからまり咲く夕顔の花です。

僧 そうですか。夕顔ですか。その、夕顔の花を仏に捧げたあなたは、どなたですか。

夕顔 お分かりいただけませんか。私は夕顔の花影から参りました。

僧 もしや、この世にいない人ですか。仏様のお花の立花供養に立ち会うために現れたのですか。ならば、なおのことお名前をお聞かせ下さい。

夕顔 名はありながら、亡くなっていますので、もはや昔のことです。

僧 五条あたりで、夕顔の経緯^{いきさつ}が、あったと聞きました…。

夕顔 いつもは、そこにいるのです。本当は…。

上げ歌

僧 おや、消えた…。花影に隠れたか。

中入り

暗 転

第二場「夕顔の宿」 時：雲林院の立花供養 その夜 所：京都五条夕顔の宿 門前

登場人物

夕顔（ソプラノ）＝亡霊 雲林院の僧（バリトン）

地謡 光源氏（テノール） 六条御息所（メゾ・ソプラノ）

四重唱の形態で中央に列ぶ。

指し＝朗唱

僧 花の供養を終えて五条を訪ねると 夕顔の宿はそこにある
いまは夕方 垣根に夕顔が咲いている

謡い

六条 窓辺に蛍がひかり 入口をあかざが閉ざします 戸口の雨音は谷の瀬音に似て

下げ歌

六条 雨でなく 袖口を濡らすのは 廬山の雪のあけぼの

上げ歌

六条 おぼろの月が東の窓に入り 琴を照らす 淋しきは垣根越しの 秋の夕暮れの山

僧 げに物凄い風の音 すさまじい風が竹垣を鳴らす 在りし日の姿を夢で見せて下さい
菩提を深く弔いましょう

論議=会話

僧(惟光) 夕顔です。

源氏 一房とってくれないか。

夕顔 和歌をしたため、香を焚きしめた扇を…

「これにのせて、差し上げてください。枝が頼りないので」

和歌

源氏 「折りてこそ それかとも見め たそがれに ほのぼの見えし花の夕顔 花の夕顔」
折り取ってこそ、黄昏にほのぼのとあなたが見えるのです。

夕顔 「山の端の心もしらでゆく月は うはのそらにて、影や絶えなむ」

あなたの心が分からなたった私は、心が上の空で、消えて、消えて亡くなりました。
またいつお逢いできるでしょう。

昔のように美しい姿で、ご回向下さいますか。

三重唱

もちろんです。お気持ちを察しております。

夜明けを告げる鳥の声 鐘もしきりに

乗り地=謡曲を謡う

夕顔 終わりの宿は、お知らせ申しました。いつもご回向下さいませ。(下手に静かに退場)

三重唱

告げわたる^{しのめ}東雲の暁の空 明けぬ前に 夕顔の宿 明けぬ前に

夕顔の君 半蔀の中に入りて

そのまま 僧の夢となりぬ

幕